



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

小田原の提灯祭りを皮切りに、各地の夏祭りが始まる。今年ほど「涼」を楽しんだ夏は無い。蚊取り線香をたき網戸のまま風のとおり部屋で休む生活が続く。風鈴の音だけで涼しい気持ちになるから不思議だ。朝方の外気は心地よく爽やかな朝の目覚めに感謝だ。早朝の水まきで朝顔も伸びてきた。埃っぽい床は拭き掃除が欠かせないが、さっぱりした床は素足が心地よい。庭木を刈り草むしりすると風通しも良くなった。食卓には連日トマトとキュウリ、ナスがのる。一仕事した後のしそジュースに体が喜ぶ。自然と共に生きる。ちょうどこんな生活が出来る年になったという事か。被災地を思い先人の知恵に感謝の夏だ。

新九郎 8月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

	会期 展覧会名	見どころ
2011 第14回 夏休み子ども フェスティバル 参加費 いずれも 300 円 先着順：問合せ 伊勢治書店本店 0465-22-1366 1F 書籍カウンター	8/2(火) 新幹線はやぶさ を作ろう!	11:00~15:00 100名 このイベントのみ無料
	8/3(水) みんなで「100 かいだての家」を作ろう	① 11:00 15名 小低学 ② 13:30 15名 年
	8/4(木) くもんの めい ろ・かみ工作で遊ぼう!	① 10:30 16組 2-6才 ② 13:30 16組 2-6才
	8/5(金) あき箱で作る 「びっくりカメラ」	① 11:00 30名 3-小低 ② 13:30 30名 3-小低
	8/8(月) ハサミでフキキ キ! 切り紙の世界	① 11:00 20名 小低学 ② 13:30 20名 小低学
	8/9(火) ペットボトルで 遊ぼう!	① 11:00 15名 小低学 ② 13:30 15名 小低学
講演会	8/14(日) 13:00-14:30 8.15 を考える会主催	「カッチャンはなぜ死んだの か?—日本近代史から考える ヒロシマとフクシマー—」
	8/19(金) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500 円
	8/24(水)-8/29(月) 常設展	シルクスクリーン版画展 横尾忠則、饗嘸、谷川晃一他
	8/31(水)-9/5(月) 森の気まぐれ 3 人展	藍染・陶芸・彫金、3人の女性 によるおしゃれで楽しい展覧 会です。小田原の木材を使っ た展示台もいい雰囲気(山盛 りの会協賛)

会期・展覧会名	会場
8/3(水)~8/8(月) 西ゆり会美術展	飛鳥画廊 0465-24-2411
8/17(水)~8/22(月) K・M 会展	飛鳥画廊 0465-24-2411
8/31(水)~9/5(月) 渋谷利夫回顧展	飛鳥画廊 0465-24-2411
8/3(水)~8/8(月) 第 19 回県西の作家達展	アオキ画廊 0465-23-5624
8/17(水)~8/22(月) ハッスル美術展	アオキ画廊 0465-23-5624
7/26(火)~8/7(日) キム オンジョン個展	すどう美術館 0465-36-0740
8/7(日)~9/4(日) 勝田素子展	すどう美術館 0465-36-0740
8/23(火)~9/4(日) 高橋玉恵展	すどう美術館 0465-36-0740
7/30(土)~8/14(日) Art Now in ようげつ	ようげつ(ダイヤ街) 0465-22-0711
8/18(木)~31(水) Art Now in 清閑亭 “初涼”	清閑亭 0465-22-2834
8/3(水)~8/28(日) 宮富ガラス工房展	レストラン荷風(松田寄) 0465-88-3021
8/31(水)~9/4(日) 第 4 回西さがみ美術交流展	小田原市民会館 2F 展示室 0465-22-7146
8/1(月)~31(水) 秋月会かな書展	はげ八鯨 火休 0465-22-0945

パリだより

横井山泰



7月14日パリ祭を過ぎると、バカンスシーズンとなる。観光客を残して街から人が消える。夏本番と言いたいところではあるが、最高気温 23℃前後が続いている。バーゲンも終わり、ブティックのディスプレイは秋冬ものになった。もう秋がやってきたような気分になる。さて、パリ祭

「1789 年同日に発生しフランス革命の発端となったバスチーユ監獄襲撃および、この事件の一周年を記念して翌年 1790 年におこなわれた建国記念日が起源となっている。」凱旋門からコンコルド広場の大統領のもとに軍事パレードが行われる。特殊部隊から戦車まで登場する様子を生放送で観た。1976 年生まれの日本人には違和感を感じる行進であるが、それもフランスなのだ。(昔、深夜映画でみた、「ジャッカルの日」のクライマックスはこの場面だったのかと、今更気付く。) 日没後にはエッフェル塔のライトが消えて麓から花火が揚がった。パリを去る僕たちの真上で炸裂する様を、はるか離れたボンヌフ橋から思った。

小田原怪獣散歩

若林寧人

子供の頃から大好きな怪獣で、大好きな故郷小田原の名所や風景を紹介するイラストシリーズ



なぜ怪獣は巨大で荒々しいのか。それは自然に対する畏怖の象徴という面もあるからだろう。小田原唯一の海水浴場である御幸の浜に上陸し西湘バイパスを破壊

するこの怪獣を描いたのは数年前のことだが、今見返してみると津波への恐怖がイメージの根源にあるのは否めない。今回の震災の津波は本当に恐ろしかった。高台へ避難した人々の祈りを無視するように強大な力で容赦なく街を破壊していく様子は、不謹慎かもしれないが初期のゴジラ映画の恐怖が現実になったかのように感じた。私はあの日尋常でない大地の揺れとともに覚えた「恐怖」の感覚を忘れない様にしたい。それはきっと「希望」や「喜び」と同じように創造の源となるものだと思うから。

狩野一信 「五百羅漢展」をみて



期待せずに行った展覧会で大きな感動を得た経験はだれしもお持ちだろう。この展覧会はまさにそれだった。国立博物館の『写楽』展のついでに立ち寄った江戸東京博物館で出会った狩野一信『五百羅漢展』は実にインパクトを受けた展覧会だった。

入口の解説にざっと目を通す。『浄土宗開祖法然上人が遷化され八百年を迎える節目の年の特別展であること・増上寺の寺宝『五百羅漢図』百幅を一挙公開するのは初めてであること』などが紹介されていた。気になったのは、狩野一信が39歳から10年を制作に没頭し48歳96幅まで描いたところで亡くなったため残りを妻妙安と弟子が補作して増上寺に納めたと言うことだった。その意味は後になって納得したのだった。

仏画には馴染みはないが一幅目からその色彩の美しさと、実にしっかりと描き込まれているその画面に見入ってしまった。表具も含めれば縦3メートルは裕に越える大きさ、そこに描かれている個性的な羅漢、その衣服・家具・背景の樹木や空までがこれでもかと言わんばかりの緻密さに描かれていた。頭に金の輪があるのが羅漢様なのだろうがこれは何をしているのだろう。そんな私の様な素人のために作品には丁寧な解説がされていた。第1から8幅までは「名相」羅漢たちの日常生活の様子だと有る。その解説が実にカジュアルで楽しいのだ。羅漢の生活に続き羅漢がこれから僧になろうとする人への訓戒を受ける場面、反省会の様子、論議など絵巻物でも見ているような展開で、企画者の想いの伝わる解説に促されるように見て歩いた。

作品は二幅一對の展示で連続物もあれば背景の異なるものもあつたがバランスは良く計算されていた。どれもケースに入っているが作品の邪魔にはなっていない。頭髪の本一本までもがその筆跡の緊張感が伝わる良い距離感で、実に見易く丁寧な展示だった。

場面が変わったのは六道地獄の図だった。生々しい描写ながら迫力ある画面に釘付けになった。体中に目を持つ鬼、火を吹く龍、羅漢にすがって助かろうとする血みどろの人々、画面をはみ出さんばかりの迫力ある地獄絵は渾身の力を振り絞って描いたであろう画家の魂が感じられた。それと同時にこの一幅を描くのに掛かる時間を思った。10年で100幅、1年で10幅。月に1枚のペースで仕上げたと思われる数字がどれほど過酷なものであつたかを想像した。1枚1枚の下書き、さらにはその下敷きとなる登場人物たちのデッサン、構図、彩色など考えるとこれは体を壊す仕事ぶりだとそんな気持ちも入り混じって見入っていた。「羅漢」とは悟りを得た人だと言うが、そんな近寄りた人物としてではなくむしろ人間味あふれる人として見る楽しみに変わっていた。鬼退治にはビームのような光線を発していたり羅漢の顔をめくると中から観音様のお顔が出てきたりと、奇抜な場面も楽しくその表現力の豊かさにも圧倒された。次々に登場する動物たち、象や麒麟、一角獣などもとても愛嬌があり水木しげるの世界やトロロの猫バスかと思う虎の登場などアニメの世界をも思わせた。

しかし前半の興味は正直最後の作品の前ではすでに切れていた。鑑賞疲れもだが作品が凡庸な物にいつしか変わっていたからかもしれない。しかし、こうして狩野一信と言う初めて知った絵師の仕事と生涯を見れたことは、貴重だった。この絵師の名を忘れることは無いからだ。

10年間をかけて命がけて取り組んだこの作品を、150年後に「江戸博」というメジャーな場所で観る者を圧倒させたことこそ一信の望みだったに違いない。見事に後世に名を残したのだ。しかし「五百羅漢」の仕事に燃え尽き、最後の完成を見ることなく逝った絵師の無念さと思うとき、ゴッホやモジリアニと同様選ばれた希有な作家であることは間違いない。

展覧会の後カタログを買っても家でじっくり読むことはほとんどない。しかし今回は珍しく読みたかった。狩野一信と言う人物への興味、どうして百幅が無傷に残っていたのか、この仕事を支えた人はいたのかなど展覧会の背景にも興味を持ったからだ。

このプロデューサーは テレビでもお馴染みの日本美術史家山下裕二さん（明治学院大学教授）だった。今回の展覧会の敷居の低さと分かりやすさ、展示の素晴らしさにまた好印象を持った。ここまでの実現には、並々ならぬ山下さんの想いがあつたこと、この作品のための展示ケースを作りインスタレーション的に展示したこと、何よりもタイトルにあつた「日本第一ノ美術」へのこだわりを持って開催したことを知り、企画者の想いが展覧会を作ることを改めて確認した。

この一信の作品完成を金銭的に支えたのは一信・妙安と同世代とされる源興院（増上寺の子院）住職慎誉亮迪だった。「日本第一ノ美術」という言葉はこの人物の過去帳の記述にあつたと言う。幕末には用いられていなかった「美術」という言葉に亮迪と同じ思いを持つ山下さんの『この強靱で鮮烈な作品が、往々にして固定化してしまいがちな日本美術史に鋭い楔を打ち込むような劇薬として機能してほしいのである』さらに『「日本美術史」は常に、不断に書き換えられるべきだ。かつて若冲も蕭白もいない「日本美術史」が語られていた。少なくとも「一信がいる日本美術史」に書き換えられてほしいものだ』と言う言葉からもその思いが伝わった。

増上寺は徳川家の菩提寺として多くの貴重な書画・絵画等を秘蔵していたが、昭和20年5月の東京大空襲でそのほとんどを失った。そんな中『五百羅漢図』は百幅全てが災害を逃れることが出来た。これは一信の死後「羅漢堂」を建て寺守をしていた妻妙安のおかげであり、今年150年ぶりの一挙公開の機会を得ることが出来たのも山下氏に見いだされたのも、一信の絵師としての執念のようなものを感じてしまう。「800年前戦乱と貧困にあえぐ庶民を仏教によって救済しよう」と青春を埋没させ書を読み行に励みいかなる人でも南無阿彌陀仏を唱えることで阿彌陀仏に救われる」ことを説かれた法然上人の想いが、震災と言う大きな傷を負った年に開催されたのも、何かのご縁なのかもしれないとしみじみ感じている。（新九郎友の会 木下和子）

7月のこと



7/14(木)～7/18(月)小田原銀座通り6つの会場を使い、「第9回西さがみ街なみ・ふる里再発見」展」が開催されました。銀座商店会の主催で街の活性化事業として始められたもので、賞なし・審査なし・出品料なし・全作品展示・こどもから大人までプロアマ問わず、とにかく絵の好きな方にご参加いただき楽しんでください、というものである。今年是一般作品208点、児童作品43点、合計251点が集まり、入場者数も延2000人を超え大変な賑わいでした。年々参加者の輪が広がっています。遠くは厚木・秦野からの方もいます。技法面でも多種になり、一昨年からの切り絵に加え今年は木版画も加わりました。もともと「街なみ再発見展」というテーマで始まった展覧会です。やはり街の絵は表情があり面白いです。中町にある銭湯は昭和の面影を残し、懐かしく、写真と絵の方がモチーフにしてみました。小田原駅前（東口）のビルの絵は現代的な表情を見せ、対照的にお蕎麦屋さんの絵は日本的な情緒を醸し出しています。木版画で表現された湯河原の通りもひなびた温泉街のいい味が感じられます。入生田の裏通りの絵は生活感を漂わせ、静かなたたずまいを見せています。清閑亭の部屋を低いアングルで捉えた写真は明治時代の別荘のすばらしさを伝えます。清閑亭の絵は今回22点集まり、その作品で10月に清閑亭を会場に展覧会をすることになりました。今こうして見ている風景も、いずれ失われていくものもあるかもしれません。この西さがみにはまだまだ魅力のある場所が一杯ある筈です。もっと掘り起こしていただければと思います。また会場当番をしていただいたことで、他のグループの方と話す機会ができ、出品者同志の交流の輪もひろがりました。こうしたことも大切にしていきたいと思っています。来年は10周年記念展となります。パフォーマンスでなくより一層内容が充実した展覧会になることを願っています。㊦